

---

令和2年

# 8月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

## 新たなブランドづくり

### 郡上農林 ■ スマート農業 畑地センサで、だいこんほ場を見える化

8月1日「ひるがの高原だいこんスマート農業実証」にて、畑地センサ「MIHARAS」を高鷲地内の条件の異なる5カ所のほ場に設置した。畑地センサで気温、地温、土壌水分、EC値を24時間自動測定し、クラウドにデータを蓄積することで、農家と普及指導員との情報共有が速やかに行える。

だいこん栽培では、夏季の灌水や追肥作業のタイミングが重要だが、これまでは農家の経験と勘によって実施されてきた。今回設置した畑地センサにより、ほ場状態を測定値して見える化することができれば、経験の浅い者でも適期作業が可能となる。

農業普及課ではセンサデータとだいこんの生育を比較分析するなど、新たな技術の普及に取り組む。



【畑地センサと表示画面】

## 多様な担い手づくり

### 中濃農林 ■ 指導農業士活動支援 中濃ブロック研修会の開催

8月26日、中濃、郡上、可茂の各地区指導農業士会合同による現地研修会が郡上市高鷲地区において開催された。優良経営事例の視察を行うとともに、中濃圏域の指導農業士の交流と情報収集・交換を図るもので、毎年、開催地区を変えて行っている。

当日は指導農業士12名の他、農林事務所職員5名も参加し、現地の2経営体を視察した。(株)ひるがのリーリオではユリ栽培における株式会社化のねらいや、雇用労力確保の工夫などについて話を伺った。(株)エスタンシアでは草刈りロボットの導入効果について現場でのデモを通じて学ぶことが出来た。

参加した各指導農業士からは、自分の経営に活かすことができる視察であったとの感想であった。農業普及課では今後も指導農業士活動の支援を行っていく。



【草刈りロボットの現地デモ】

### 農業革新支援センター ■ 飛騨牛 飛騨牛繁殖研修センター 子牛初出荷

8月7日、飛騨牛繁殖研修センターで誕生した子牛4頭が、初めて関子牛市場へ出荷された。子牛は昨年11月から12月に生まれた去勢3頭と雌1頭で、上々の価格でせり落とされた。12月からは研修生が分娩に立ち会って哺育育成※した子牛の出荷が始まる予定である。

当センターでは、繁殖部門としてJA全農岐阜が主体となり牛の繁殖管理から子牛生産まで行っている。研修生はその実践的な作業に取り組む中で、繁殖経営に必要な技術や知識を修得していくことになる。県では、研修生が身につけた知識や技術を生かせるよう、地域就農支援協議会や就農応援隊と情報共有を図りながら、就農に向けた支援を行っていく。

※動物の子に乳や食物を与えることにより、成体まで育てること



【子牛出荷】

## 売れるブランドづくり

### 岐阜農林 ■ スマート農業 ドローンによる水稲防除を実施

瑞穂市巣南町の(農)巣南営農組合では、国の「スマート農業加速化実証プロジェクト」において、各種スマート農業機械を活用し、輸出用米の超低コスト生産を目指している。

8月11日と21～23日には、最新機種ドローンを使用して、輸出用米として作付けされている「ハツシモ」と「にじのきらめき」の防除作業を行った。農業普及課、ドローン製造会社、全農岐阜等が立合い、営農組合の女性従業員が操縦して水田約20haに農薬散布し、その作業性を確認した。

今年度岐阜管内では巣南営農組合を含め4機のドローンが水稻防除を行う見込みである。さらにその他複数の農業法人でドローンの新規導入が計画されている。農業普及課では作業効率や防除効果の検証を行い、ラジコンヘリに代わる省力・時間短縮防除機として更なる普及を進めていく。



【ドローン防除の様子】

### 西濃農林 ■ スマート農業 自動操舵トラクターによる大豆不耕起播種

「海津CAFスマート農業検討会」は、大豆不耕起栽培における自動操舵トラクターの導入実証に取り組んでおり、8月8日に海津市内のほ場で播種作業を行った。

当日は、自動操舵トラクターと通常のトラクターの作業について、労働負担の軽重や作業時間等の比較調査を行った。また、夜間作業を検証するため、夕刻以降にも自動操舵トラクターの作業を行った。自動操舵はターンの速度が遅く、若干作業時間がかかったものの、初心者でも精度の高い作業を行うことができ疲労が少なかった。夜間作業については、作業状況が目視で確認しづらい等の条件はあったが、日中と同様に作業を行うことができた。

農林事務所では、大豆の出芽揃い時に作業精度の調査を行うなど、引き続き検討会での実証を支援していく。



【自動操舵による夜間作業】

### 揖斐農林 ■ フランネルフラワー 細霧冷房による切花品質向上※

フランネルフラワーの秋出荷を控え、全農岐阜、農業技術センター、農業経営課及び農業普及課によるほ場巡回を8月14日に行った。

フランネルフラワーは四季咲き性の高い品種ファンシーマリエが開発され、秋の需要期にも出荷対応でき、切り花品質は安定してきている。ただし夏季の高温により切花長が短くなるため、8月から細霧冷房による安定生産に向けた栽培実証を開始した。結果、梅雨明け後の連日の猛暑の中においても、切花長は長く大きめの花の出荷が期待されている。

※切り花は気温が高いほど開花が早くなり、切り花長は短くなるため、ハウス内気温を下げる目的で細霧冷房を導入。市場評価は切り花長が長いほど良いとされる。



【ほ場巡回の様子】

### 可茂農林 ■ 多収性米「ほしじるし」 生育、病害発生状況の調査

可児地域では主力品種「あさひの夢」から多収性品種「ほしじるし」へ来年度切り替えを予定しており、JAめぐみのと連携して栽培暦の作成に取り組んでいる。

出穂期調査の結果、慣行品種「あさひの夢」が8月18日（昨年17日）に対し、「ほしじるし」は8月14日（昨年13日）となり、「あさひの夢」と比べ4日程度出穂期が早いことが確認できた。また、新技術導入普及支援事業にて設置した「ほしじるし」実証ほ場においては、紋枯病初発時に追加防除を行った結果、発生株率、発生葉位ともに低く抑えられており、追加防除の効果を実証できた。

引き続き生育調査等を行い、品種特性を把握するとともに、栽培暦への反映を図り、担い手の経営安定につながるよう支援していく。



【出穂期の「ほしじるし」】

## 東濃農林■直売野菜 **ネギの周年栽培の波及を図る研修会**

8月17日、きなあつ瑞浪出荷者協会による野菜研修会が、瑞浪市内の出荷者の農園で開催され、14名が参加した。この農園ではネギのチェーンポット苗による省力定植と周年栽培を行っており、協会員へ波及を図り、直売所での周年供給品目へ育て上げる目的で開催された。農業普及課では、園主と共に時期別品種などの説明を行ったほか、事前に撮影した短時間で定植作業の動画を用いた説明も行った。

現在、この農園で育苗されたチェーンポット苗を利用し、省力化を体感する協会員も増えつつある。今後はネギ以外の品目も含め、直売所での周年安定供給品目が増えるよう支援してゆく。



【現地研修会の様子】

## 恵那農林■なす **3S栽培の新規導入を支援**

夏秋なす3S栽培は地域導入後10年目となり、土耕栽培と同等以上の収量性を確保したうえで、土壌病害対策や作業の軽作業化等の効果を得られると評価を得た。導入者数及び面積は産地の2割以上を占めており、なす新規生産者確保に向けた対策の一つとして産地は導入を推進している。

8月13日には農業普及課が企画し、東美濃夏秋なす生産者協会主催による第一回3S栽培研究会を開催した。3S栽培既導入者だけでなく、次年度の新規栽培検討者にも出席を勧め、栽培システムの概要や導入メリットの説明等を行った。新規栽培検討者4名が出席し、うち2名が3S栽培導入の意向を示した。

夏秋なすは県下の市場出荷野菜の中で生産者減少が顕著な品目である。3S栽培は栽培技術改善だけでなく、生産者確保の面も有望と考えられ、産地振興への有効な手段の一つとして支援を継続したい。



【なす3S栽培研修会】

## 下呂農林■スマート農業 **無人遠隔草刈機の現地検討を実施**

県では下呂市金山町の法人経営体2社を実証対象としたスマート農業加速化実証プロジェクト（国補）の採択を受け、実証活動に取り組んでいる。

7月31日には対象法人が無線遠隔草刈機を用いた水田畦畔の草刈り作業を行うため、現地検討を実施した。JAひだ、関連事業者、県（農政課・下呂農林事務所）が、実際にスマート農機を操作するオペレーターを交えて、スマート農機の効果的な活用、利用拡大に向けた意見交換、情報交換を行った。

農業普及課では今回得られた意見・情報等を基に、中山間地域における、組みやすいスマート農業技術の確立を目指し実証関係者間で協議を進めている。今後も本実証が地域のモデルとなるよう実証活動を推進する。



【現地検討の様子】

## 飛騨農林■トマト・モモ新技術導入 **空調服による夏季の労働負荷軽減効果の実証**

農業普及課では、新技術導入普及支援事業を活用して、空調服（電動ファンを備え、衣服内に外気を送り込むことができる）が夏場のトマト栽培管理、モモの箱詰め作業に与える労働負荷軽減効果について調査を行った。

生活技術研究所の協力のもと夏秋トマト生産者3戸、モモ生産者2戸に対し、空調服着用時の衣服内温湿度、体表面温度、心拍数、疲労度、作業性等を調査した。心拍数モニタリングにはスマートウォッチとタブレットを活用した。実証した生産者は、「夏の昼間でもこれなら作業できる」「高温時の着用により発汗量が少なくなった」と空調服の有効性を実感している様子であった。

今後はデータを詳しく解析し、労働負荷軽減効果についてトマトやモモの反省会等で農家へ結果の報告を行う。



【空調服の着用】